515
講談社現代新書

問の世界

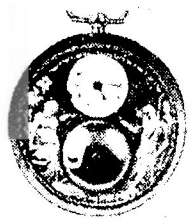
碩学に聞く——上

一筋になるには好奇心がありすぎる。て各分野を一人でやったら、一生かかってもめぶない。みなほどほどで水くさくなる。やったら……。京都大学人文科学研究所はンスの百科全書派にヒントをえ、京都のとあいまって、日本で有数の人として歴史を重ねている。本書は、心に活躍する上記の碩学五氏が、つつ、学問の苦楽、師や友とのふれあいなど、とっておきの逸話を語った興味あふれる書。

加藤秀俊＋小松左京

学問の世界——㊤
昭和五三年八月二〇日第一刷発行　昭和五三年一二月五日第二刷発行
定価——三九〇円
著者——加藤秀俊＋小松左京
© Hidetoshi Kato＋Sakyo Komatsu 1978 Printed in Japan
発行者——野間省一　発行所——株式会社講談社
東京都文京区音羽二—二一—二一　郵便番号一二一　電話〇三—九四五—一一一一　振替東京八—三九三〇
装幀者——杉浦康平＋鈴木一誌
印刷所——凸版印刷株式会社　製本所——株式会社大進堂
0200-455150-2253 (0)
落丁本・乱丁本はおとりかえします（学1）

加藤秀俊＋小松左京



学問の世界

碩学に聞く㊤

まえがき

小松左京

世に「碩学」といわれる方たちは、多少の例外はあっても、私のような市井人にとっては、日頃はなはだ遠い存在であって、書かれたものを拝見して、感嘆したり畏敬の念に駆られる事はしばしばだが、親しく謦咳に接し、長時間席を伴にさせていただく機会など、そう簡単にあるものではない。

その望外の機会が、講談社の小冊子「本」の企画としてめぐって来た。——私としては雀躍したが、反面浅学の身として足のすくむ思いもした。しかし、幸いにも今回は畏友加藤秀俊氏と一緒に諸先生のお話をうかがう事になったので、学問的な事は氏の驥尾に付く事にし、私は専ら、同時代における大先達の方たちの、知的、学問的形成の背景を拝聴する事にした。

お話をおうかがいした諸先生方は、日本近代の中期、大正の後半から昭和の戦前、戦中、戦後と、日本社会全般の「第二の激動期」に、学問の世界のみならず、社会的にも活躍された方ばかりである。——明治維新によってスタートした日本社会の近代化は、いくつもの新しい課題にぶつかり、そのあるものはのりこえ、あるものは解決に失敗しつつ、昭和戦前の反動期をむかえ、戦後は、より新しいタイプの「大衆市民社会」へむけての脱皮という、大きな課題に直

面した。その変革は、社会のシステム、生活様式、文化、思想の全般にかかわるものであり、学問の世界においても、学問の内容のみにとどまらず、研究組織の運営や学者を育てて行くしくみ、学問というものの社会と時代へのかかわり方、とりわけ新しい国際社会との関係などにおいて、広範な改革と脱皮の必要にせまられたと思う。

この企画を通じて、お話をうかがう事のできた諸先生方は、それぞれ御専門の領域で、新しいエコールを創立されるほどの業蹟をあげられながら、一方では象牙の塔内にのみ閉じこもられる事なく、このはげしい社会の変動・改革期にあって、学問の精神の健全な伝統を、社会の「良識」へ反映させる事によって、学問・知性と社会との新しい関係を創出して行く上に、大きな功績のあった方々ばかりである。——おのおのの御専門の事をうかがえば、それこそ諸碩学の事とて、きわめて含蓄深いが、一方ではその御専門の領域を、常に、社会、時代、文明の大きな流れとの関係において客観的にながめる、というみずみずしい感覚を保たれており、それ故、私の如き門前の一中年もすっかり魅了され、正直言ってお話をうかがっている間は、時のたつのを忘れるほどだった。

その果された社会的功績と学風からすれば当然の事であろうが、どの先生も、今日風にいえば、「学際的」な関心を強くお持ちになっている点にも強い感銘をうけた。お話をうかがっているうちに、大学すなわち「大いなる」学問とは、もともと学際的なもの——というよりは、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

人間とそれをとりまく世界・環境全般に対する、大いなる知的関心・好奇心を根本にするものであって、「学際性」なるものは、一見組織面で日本より進んでいるように見える海外から、戦後ことあたらしく輸入されたきらきらしい舶来の方法ではなく、むしろそれあっての「専門」であり「大学」だったのではないか、という印象を持つにいたった。諸先生はいずれも現在、社会的現役であり、その御活躍は、今なお私たちの眼前する所であるが、そういう点では、明治近代創学の若々しくのびやかな息吹きを、諸先生方御自身の雰囲気を通じてうかがえたように思う。その意味で、私たちは、まさに明治の「碩学」の統の一端に触れる事ができたのであろう。

口幅ったい事をいうようであるが、「歴史を未来へ」というのが最近の私のスローガンである。歴史を学ぶ、という事は、単に過去の記録・資料を精密にとりあつかう事にとどまるものでない事はいうまでもあるまい。歴史は先人の壮大な「経験」の集積であって、その中には、現代に生きている人々と同じ生身の人々が、その時代時代の状況の中で、さまざまな問題にぶつかって行った選択や決断があり、そのおりおりの選択、決断が、のちにどういう結果をうんだかも記録の中に見てとる事ができる。——成功もあり、失敗もあるそれらの選択の中に、とりわけ「すぐれた」選択があり、それが一つの成業として今の世の「よきもの」を形づくっているのだが、そこには時代の変転の彼方に時代をこえた「すぐれたもの」の姿を見わけ、それ

を時代の変化にそってふたたび新しい生命を吹きこみ、後生へ伝えたなみはずれてすぐれた先人の選択が働いている。

気楽な座談というスタイルに快く応じてくださった諸先生方は、時代のおりおりになされた選択についてきわめて人間的な側面を披露してくださったわけであるが、私自身は逆に、人間くさい「現在」の日常の中に、常に重大な選択の契機がひそんでおり、その選択をあやまらないためにも、市井人といえども折りにふれ学問がえらびとり、整理しておいてくれる「よきもの」「すぐれたもの」にふれて、それに対する感覚を磨いておく必要がある事を痛感した次第である。

目次

まえがき——小松左京……2

1—桑原武夫——京大人文研育ての親……9

1—京大人文研誕生前夜　10
2—家学とフランス好きと　20
3—京都学派の伝統　27
4—登山から学んだこと　33
5—共同研究と知的好奇心　39
6—いま大切なこと　49

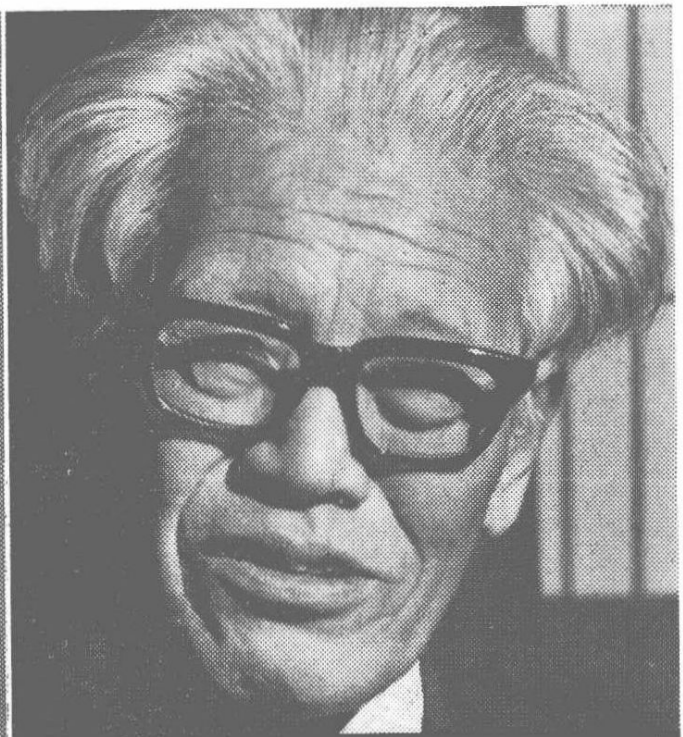
2—貝塚茂樹——東洋史学の開拓者……55

1—小川家三代の知的系譜　56

2—京大史学の黄金時代　67
3—わが師とシナ学　72
4—中国文化の比較史的研究　79
5—中国人のおもしろさ　86
6—学問をこえたもの　94
3—西堀栄三郎——巨大なテクノロジスト……103
1—南極と原子力と　104
2—実験物理屋の自負心　110
3—少年の日々　118
4—南極のエジソン　125
5—わが師・わが友　136
6—テクノロジーの本質　142
4—今西錦司——今西進化論の本家……147
1—京都人の山登り　148

2—昆虫採集から農学部へ 154
3—サルばなれということ 168
4—「自然学」のすすめ 175
5—ダーウィンとの対決 186
6—ニルヴァーナの世界 191
5—篠田統——八宗兼学一条の道……197
1—十年保証の化学志願 198
2—戦争のころ 205
3—食物史への道 214
4—米食・肉食考 217
5—学問の楽しさ 225

1―桑原武夫――京大人文研育ての親



〔くわばら　たけお〕
一九〇四年（明治三七年）福井県敦賀市生まれ。
京都大学文学部フランス文学科卒。
一九六八年まで京都大学人文科学研究所教授。
現在は同大学名誉教授。
十二年間学術会議副会長をつとめた。
著書は、『桑原武夫全集』（全八巻・朝日新聞社）、『第二芸術』『フランス学序説』（共に講談社学術文庫）ほか多数。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1——京大人文研誕生前夜

桑原　「碩学に聞く」というのははなはだ困るな。ぼくは碩学でないし、碩学という感じでもない。

小松　学の定義によりますけれども、やはり先生は碩学ですよ。大教養人。

加藤　大教養人。——先生のいわば自叙伝がございましたね。

桑原　子供のときのことね。『思い出すこと・忘れえぬ人』というのに、高等学校へ入るところまでは書いてありますけれども。

加藤　先生はどんな小学生だったんですか。

桑原　ぼくは優秀な小学生でした。模範生です。(笑)

小松　たとえばどんなものを読んでおられて……。

桑原　何を読んでいたかな。たとえば巌谷小波の『世界お伽噺』百冊あります。あれ全部読み上げました。うちに二、三冊あって、あと京都のまだ残っている府立図書館へ通ったりして、とにかく全部読みましたね。字は小学校へ入る前から知っていた。

加藤　漢字はお手のものですね。

桑原　漢字は少し知っていましたね。それから『通俗三国志』など……。その時分の中学生には、ませたやつがいましたよ。

小松　大正年代ですな。

桑原　私が京都の一中へ入ったのは大正六年で、ぼくはそのとき押川春浪とか三津木春影とか、ああいうものを読んでいた。貝塚(茂樹)と話したら、「紙治にはね」などというのが解らない。紙屋治兵衛ですね。「きみ、近松読んでへんの」というわけや。貝塚は一年生のときに近松の心中もの全部読み上げていたのや。これはけったいなやつがおると思ってね。

小松　大正というのは不思議な時代ですね。

桑原　貝塚は中学校の二年生のときに高畠素之の訳で『資本論』を読んでいました。

小松　大正というのは世界志向でコスモポリタンでね。

桑原　『大正時代』というのを南博さんが出しているでしょう。

加藤　早熟児をたくさんつくっている時代ですね。

桑原　あの時分のぼくのクラスの上の方の連中は、いまの大学生くらいの知的広さでした。そのかわり、下のほうには全然勉強せんのがいましたね。中学の五年生くらいで、ぼくのクラスではなかったけれども、女郎屋へ行ったのがいましたね。それから活動写真を始めた日活というのがありましたでしょう。その日活の横田のせがれと同級ですが、これは中学出た翌年に大

津の芸者と心中しているしね。そういうのもいたわけです。

加藤　小松さんは私より古いわけですが、私などが一青年として桑原先生を存じ上げたのは「第二芸術論」ですね。その次にひじょうに親しくお教えをうけたのは、京大の人文科学研究所に来てからです。そのあたりからお話をうかがいたいと思いますが、先生は人文にはどういうご縁で来られたんですか。

桑原　私は東北大学に昭和十八年から行っておったんです。荒木貞夫という陸軍大将が文部大臣として京大へ査察に来たことがある。まだ戦争にはなっていないけれども、侵略は始まっていた。みなおそれ入っていたときに、石川興二という河上肇の弟子で当時は右寄りだった教授が、現代シナのことをちゃんとやらんとあかん、とはっぱをかけた。すると、単純な軍人やから感動しよった。人文科学研究所というのはそれで昭和十四年にできたわけですよ。これは京大であまり言いたがらへんけど……。それでずっときたのですが、敗戦のときは高坂正顕さんが所長をやっていたのですけれども、アメリカ占領軍から、そういう研究所はけしからんというので、取り潰しになるわけです。

　そのほかに東方文化研究所というものがありました。それがいま北白川にあるものですね。これは中国の北清事変、義和団事件のときの賠償金がうんと入って、その賠償金を文化に使わんといかんというので、東京と京都に昭和四年に東方文化研究所ができて、京都は初代の所長

が狩野直喜先生で、私のおやじ（桑原隲蔵）などもその評議員をしておった。吉川幸次郎とか貝塚茂樹等々はそこで育つわけですね。そういうものがありました。

それからもう一つ、日独文化研究所というものがあった。これはナチスの時分にできたわけですよ。

小松　日独文化協定か何かですか。

桑原　そこはナチス的だったが大山定一君などもいた。もちろん大山さんはたいへんリベラルな、むしろ少し左がかった人なんですけれども、時世時節ですから、そこに雌伏していやはったわけです。これは基金のなかにヒットラーの金も入れているというようなことで、占領軍がすぐだめという。それで「日独というのはぐあいが悪い」というので、世界文化研究所というふうに急遽名前を変えてごまかそうとしたんですけれども、あかんというわけですよ。

それでその三つを合併しまして、新たに人文科学研究所ということにして再興するということにした。これはアメリカも異存がなかった。それの初代の所長になり、いろいろ企画をしたのが東洋学者の安部健夫君、これは貝塚君などと同級で、ぼくは三高のときからよく知っている。安部君がいろいろプランを立てて、桑原を呼ぼうじゃないか。というのは、こんどの人文科学研究所というのは、中国だけでなく、中国と日本と西洋をやろうということになったが、ドイツではぐあいが悪いんです。それでアメリカ学か、フランス学か、イギリス学をやってい

る人ということで、桑原ではどうだろうということになったらしいんですね。吉川さんをはじめみんなが賛成して、それで私のところへ交渉がありました。

これはいつか一ぺん書いておかなければならんのですけれども、昭和二十三年にできたんです。その前に、つい最近亡くなった鳥養利三郎先生、総長ですが、これは電気工学の大家ですけれども、総長としてものすごくえらい人だと私は思います。ぼくは京都まで呼ばれて、きみ、来てくれるかと内交渉があった。ぼくは、先生、予算は通るんですか、本気になってプランを考えても、来られるんですかと言うたら、絶対できる、心配無用と。そこで安部君が人文研六〇講座案というのを出しよったんですよ。

加藤　壮大なものですね。

桑原　六〇というて出したら、文部省にその講座名を言えといわれ、思いつかへん。(笑)安部さんと二人で考えたが、比較言語学とか、社会心理学とか、六〇を一晩で考えるのはしんどいでっせ。もちろん六〇は通らんと思うていた。そして一一講座通ったわけです。東大には社研というのがそのときできたんですが、これは一〇講座。東大が創立以来京大に抜かれたのは、このときと、京大文学部ができたときに東洋史は三講座、そのなかに私のおやじも一人入っておるんです。だから、東大は桑原家二代に討ち取られたというわけや。(笑)それは冗談ですけれども。

アメリカの占領軍のなかに、若い学者でA・M・ハルパーンという人物がおったんです。これは言語学者でなかなかえらかった。アメリカ・インディアンの言語を研究していたけれども、日本語を戦争中に勉強して、日本へ来たときはペラペラでした。それが東北大学へ査察に来た。そして、東北大学の総長以下教官を集めて演説をぶちよったわけです。

小松　日本語で？

桑原　日本語で。自慢なんですよ。お国は、『源氏物語』というふうなすばらしい芸術をもっている。それがいま愚かしい戦争をやってこうなったんだ、だから自信をもって復興せよ、というふうなことを言いよった。そしてアメリカ流に質問ないかと言うから、ぼくは助教授でしたけれども、手を挙げて、あなたはいま『源氏物語』という例を引いて、ここに集まっている教官はみな『源氏物語』を読んでいるみたいな発言だが、それはぜんぜん間違いだ、何人読んでいるか調べてごらんと言うた。怒りよってね。教官諸君、読んでいるものは手を挙げてくださいと言うたら、三人しか手を挙げへん。国語の先生と土居光知さんとだれか。阿部次郎さんは休んでおったしね。そしてもう一つ、あなたはがんばれと言うけれども、ポーレー賠償案のように、機関車まで持って帰られては何ができるかと言うた。総長には心配かけたらしい。そしたらその晩になって大学当局から呼び出しがあって、出かけると、きのう質問したのはだれかと占領軍がきくから、仕方がなしに言うた、そしたらぜひ会いたいと言うているけれども、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com